

3章まとめ(5)
第6節・7節 こどもの自然への感受性・家屋画、樹木画、人物画の比較文化的検討

	必要な能力 なぜ未来型能力か？	外界を認知する能力 前頁参照	
1. 幼児・児童における未来型能力	具体的な能力	<p>自然への感受性～認知的側面に注目～ →外界認知能力の一側面である自然への認知の中の一特性。</p> <p>次世代の人間にとって必要不可欠な力であり、幼少期からこの「自然と共生する力」を形成することを教育的に意識しておくことが重要である。</p>	<p>自然への感受性～認知的側面と関係性の側面に注目～ 子どもたちが生活する環境(情報化と自然)への認知</p>
2. 幼児・児童における未来型能力の育成	現状の把握 (当該領域のオリジナルデータ・知見)	<p>視覚的刺激(海・山)と聴覚的刺激(自然に関するもの)を提示し、それぞれの内容について自由な発言を求めた。</p> <p>結果: ・子どもたちが暮らす環境が、子どもの自然への感受性に影響する ・フィジーと沖縄の子ども両者ともに山の写真への反応は少なく(写真に写っているものの説明)、海の写真への反応は大きかった(海に関連するエピソードや写真に関連する単語の表出など)。 ・身近な環境にあるものは、接触経験が多いため、対象に対する知識のネットワークが密になり、知識のスキーマが広がっている</p>	<p>→描画(家屋画、樹木画、人物画)を使って把握。 情報化が浸透しておらず、かつ自然環境が豊かな国として、ネパールを取り上げ、情報化が浸透している日本で、かつネパールと類似の山村部の自然環境である長野と比較を行う。</p> <p>結果: 【全体構成】 ネパール ・媒介による統合がややあり ・とぎれのない1本線で描かれている ・描画サイズがHTPで4分の1以下が過半数 ・課題以外の付属物がある ・地面の描写はなし ・現実的描写で描かれている。 日本との比較 ・遠近感:ネパールの子どもたちに多く示された。 ・描画のサイズ:ネパールの子どもたちが小さめで日本の子どもたちは大きめ ・地面の描写:ネパールの子どもたちは、「なし」が多い ・画面からはみだし:ネパールの子どもたちでは示されず、日本では、木と家が多かった。 ・現実的描写:ネパールの子どもたちと1981年の長野県が多かった。</p> <p>【家屋画】ネパールでは人物像が小さく、それと比較すると「家」は大きい、またその「家」をさらに包み込む存在として「山」が位置付けられている。つまり自分たちを取り囲む自然の大きさに比較したら、家や自己というのはとても小さい存在として認知されているのかもしれない。</p>
	育成方法の提案・実施	<p>日常の保育の中でも子どもも保育者も自然を体験できる機会が必要。自然に囲まれていても環境を意識した保育が必要であるし、都会といえども生活の中に自然と接触する時間を意識的に確保することで、自然を重視した保育が可能。</p>	<p>日常の保育の中でも子どもも保育者も自然を体験できる機会が必要。自然に囲まれていても環境を意識した保育が必要であるし、都会といえども生活の中に自然と接触する時間を意識的に確保することで、自然を重視した保育が可能。</p>
	育成カリキュラム実施の結果 (当該領域のオリジナルデータ・知見)	<p>子どもの自然への感受性を高めるためには、保育者の自然への感受性、および子どもの自然への感受性に気づく力が必要</p>	
3. 未来型能力を指導できる指導者育成	現状の把握 (当該領域のオリジナルデータ・知見)		
	育成方法の提案・実施	<p>デンマークやドイツ、日本で実践されている森の幼稚園など、自然を意識した保育を転換しているカリキュラムを参考にする。</p>	
	育成カリキュラム実施の結果 (当該領域のオリジナルデータ・知見)		